

# 鼻

## 映画文学人生論

原作：芥川龍之介（1916）「新思潮」  
参考：『羅生門』（1915）「帝国文学」  
『孤独地獄』（1916）  
『芋粥』（1916）「新小説」  
『手巾』（1916）「中央公論」

禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない

中学生のとき読んだ芥川龍之介の短編では『羅生門』よりも『鼻』のほうが面白かった。とぼけたユーモアがあり、ほろ苦い教訓もある。

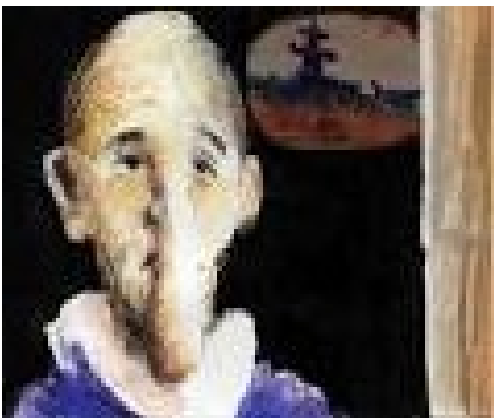
『鼻』の主人公は禅智内供という。五、六寸もある内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。五十歳を過ぎた内供は、内心では始終この鼻を苦に病んでいたが、表面では、さほど気にならないような顔をしている。

ある年の秋、京へ上った弟子の僧が、長い鼻を短くする法を医者から教わってきた。その法というのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませるといふ、きわめて簡単なやりかただ。

やってみると、うまい具合に鼻が短くなった。こうなればもう誰も嗤（わら）うものはないにちがいない。内供は満足そうに目をしばたいた。

ところが、人々は前よりも一層可笑しそうな顔をして、じろじろ内供の鼻をばかり眺めるようになった。内供は鼻の長かった頃の事を思いだし、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたるむかしをしのぶがごとく」ふさぎこんだ。

やがて、ほとんど忘れようとしていたある感覚がよみがえってきた。元の通り長い鼻が戻ってきたのである。——こうなれば、もう誰も嗤うものはないにちがいないと、内供は心の中でささやいた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。



## 鼻

映画文学人生論

芥川龍之介が「帝国文学」に『羅生門』を発表したのは大正四年。続いて、第3次「新思潮」創刊号に『鼻』を発表したのは翌大正五年。夏目漱石は『鼻』のほうに反応し、手紙を送った。

(新思潮の) あなたのものは大変面白いと思ひます落着きがあつて巫山戯(ふざけ)てゐなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります夫(そ)れから材料が非常に新しいのが眼につきます文章が要領を得て能(よ)く整つてゐます敬服しました、ああいうものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます。

この手紙によつて芥川は作家としての実力が保証され、当時の代表的な文芸誌である「新小説」と「中央公論」から原稿を依頼された。その依頼に応えて発表したのが『芋粥』と『手巾』だ。両誌とも編集者の鈴木三重吉と滝田樗陰が木曜会という漱石の面会日の常連として顔を出していた。『芋粥』と『手巾』は一般には好評だったが、自然主義の作風ではないため、自然派の文学者たちからは批判を浴びた。「かういふ作の面白味は私にはわからない。何処が面白いのかといふ気がする」と田山花袋は酷評している。

水涕や鼻の先だけ暮れ残る 芥川龍之介